ヤーウェの偶像

Grim Reaper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヤーウェの偶像

【Ｎコード】
Ｎ１６４８Ｙ

【作者名】
Ｇｒｉｍ　Ｒｅａｐｅｒ

【あらすじ】
偶像……。神を象ったそれは、それ相応の力を得た。しかし、効果は始祖の物にしか与えられない。即ち、一番最初に作られたもの……。

―Scene Prologue―

―Scene Prologue―

イギリス郊外。
ある屋敷の庭にて

悠久の自然の中に身を任せながら、
僕はひとつの世界にもまた、意識をもたれかけさせた。

「グリム」

風のうわさできいたものを、自分なりに創作してみたものである。

結構な自信作だと僕は思っている。

そんな能天気な日々は、今思うとそれはそれなりに楽しかった。うん。
でも、ね。今には遥かに敵わない。
だってね―――

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

――とんとんとん

ある昼下がり。文で表したらそうでもないが、
実際のソレは、酷くうるさいものだった。
この奥まった書斎にまで聞こえてくるのだから。
はぁーっと嘆息しながら玄関に向かう。
「はい。どなた様？」
「すみません。居候させてもらえるお屋敷を探しております、
旭川ツビルと申します」
僕が、ドアを開けるや否や、少女（？）は早口に捲し立てた。
目の前にいたのは、少し赤毛っぽい髪を短く切った少女（？）と、
切れ長の目は、ちょっと冷たさを感じるがそこまで角が鋭くない
漆黒の髪の青年。――二人共、目は黒だった。
東洋人か？
「俺はタナトス……。タナトス・ムーンガルドだ」
東洋人じゃんっ！
そんな突っ込みをしなかったのは、ある物に目が惹きつけられて
いたからだ。
――――杖？　材質は鉄、じゃないな……。
男の、男が持っている杖が何故か気になったのだ。
視線に気づいたのか、男は杖を胸の前に持ってきた。

そして、顔をさぞ面白いものを見たかのように歪めた。

「“私は神を超越しせめし―死―という者だ”」

「っ！」

……お前は……何者だっ！

―Scene 1― 訪れ（前書き）

「……ふわぁっ！」
男のしなやかな指が、少女の卵がごとく柔肌を伝い、少女の体液をぬぐう。
「我慢しなくていいよ？声をあげても……」
「だ、だいじょぶです……。お願いします……」
少女は頬を上気させ、消え入る声で懇願した。
「……いくよ」
「……んっ！ぁ……」
そして男は、少女が差し出した優美な脚を持ち上げ、少女の最も敏感な所に口を、つけた。
――――そして少女は大人になった。

―Scene 1― 訪れ

「えろぉぉぉぉぉい！！！」
ツビルが叫んだ。

「どこにいかがわしいとこがあるんだ？」
「あなたの行動全てですよっ！」
この、歩く猥褻物っ！と続くツビルの罵声に、俺は背に哀愁を漂わせた。

「言ってませんしっ！漂ってもいませんっ！
それよりツッコムべきなのは最後ですよ！なんですか！大人って」

「一皮むけたじゃないか」
「確かにねっ！」

※ついてこれてない皆様に詳細を記載する

今日も、居候させてくれる家（欲が働いて大半屋敷）を探しまわっていたタナトスとツビル。
本日も追い出されまくり、途方に暮れていたときだった。

一人の少女が横でこけたのだった。そう、それが真相である。
なんともしょぼい真相だ。

※以上

「でも、痛みを伴うことで、成長するのは確かだ……」
「そう、ですねぇ」
この通りだ……。ギャグを入れたかと思うと、間髪入れずにシリアスを
投擲してくる。ロシア兵もびっくりだ。
だから苦手なのだ、この人が……。
でも、それがこの人の、タナトスの――いや、今はまだ……。
「うむ、でも……女の子が自分を慕ってくれるっていいよね～」
シリアスモード台無しである。

腰のあたりに抱きついている少女の頭を撫でながら、タナトスはニヤニヤしていた。
ちょっと引いたね。

「この街を抜けて、この道を進んでいったら、大きなお屋敷があるんですよ」

少女は物悲しそうにしながらも、手を振り送ってくれた。タナトスだけを……。
私は睨まれたけど……。

―Scene 2― 思惑の書（前書き）

少年は、どこにでもいる中学生だった。
勉強は苦手で、仲間と遊んでばかりいたし、異性にも人並みに興味はあった。

その平凡な生活を壊したのはいつの間にかそこに君臨し、偉そうにふんぞり返った義父だった。

―Scene 2― 思惑の書

舗装された道から外れ、車は草原に出来た荒れた道を走っていた。草原を抜け、車はある集落に差し掛かった。

「ここ……は？」

カロリスは訝しげに尋ねた。

しーんっと静寂な空気を断ち切るように、タナトス・ムーンガルドは「はぁー」と、嘆息気に息を吐いた。

「例の書物がここにある、と何度言えばわかる」

「い、いや。――まぁいいです……」

カロリスが諦めたように引き下がると、今度は隣にいたツビルがタナトスにに突っかかっていた。

この二人は、二日前からカロリスの別荘に居候している東洋人であった。二人はなにかを探しているようで、昨日は街でいろいろと訊き回っていたようだ。そして翌日が、この様だ。

「さて、いきますか」

ツビルが柔らかな微笑みをこちらに向けてきた。さすが、そこらへんを出来る所は少女らしい体躯や顔をしていても、根は大人らしい。

カロリスはちらりともう一人の同居人を見た。古ぼけた車のボンネットに座っていた彼は、すっと降り、バックミラーに掛けてあったコートを素早く羽織った。冷たい目をしていながらも、目にはまだ何かが燃えている。何かが映っている……そんな感じがした。

「はい。よくわかりませんが、はやくいきましょ――」――うよ。

言う前に、タナトスに手で制され、カロリスは黙り込んだ。

何にしても怖いのだ、この人が。本能的に避けている。

「待て。カロリス、“グリム　第二小節”を読む準備をしてくれ……。覚悟を決めてな……」
カロリスは言われたとおり、出発前に渡された直筆の羊皮紙を懐から取り出した。

覚悟……とはなんなのだろうか……。
昨日、彼はこう言った。「お前がストーリーを直筆で書いてくれてて良かったよ」と。その意味がわかるのだろうか？今日ので。

っと、その時。
「っぶないっ！」
右肩に物凄い衝撃があり、カロリスは吹っ飛んだ。力を抜いてたのもあるが、青年一人をこんなにも軽々しく飛ばせるとは何事だろうか。
しゅんっ！
何かがわずか頭上を横切った。
「ボーッとすんなっ！死ぬぞっ！」
見ると、彼の前に、タナトスがたっていたのだった。
杖を振るって、投擲されるナイフやらフォークやら鋤やらハンマーやらを、打ち落としていた。それから視線を遠くした。ぼやけたタナトスの背中越しに、この村の住人であろう人達が――いや、人と呼んでいいのだろうか。意思や生気が全く感じられなかった。
だらんと垂れた両手に凶器となりえぬ物を持ち、回転させ、飛ばす。ただそれだけだった。

「あ、あれは……」
「生ける死体……というべきなんだろうが……ゾンビではない。意思をそがれたただの村人だ」
意思をそがれた？
「そうだ。だから今度は精神をそぎ返す」

理解、しかねた。
どういうことなのか、彼の頭には理解しえないことが、視覚、聴覚を襲った。
「カロン……。“第二小節”を読め……」
もう、彼には、反論する術は残されていなかった。

【狩れ。狩り取れ。
一糸のこころは流るるままに
星と月は答えた
“闇に生きし者は光に生き得ず、あらがえない”
太陽はあざ笑い、私を忌々しげに照らしつけた
天を埋め尽くす幾億の小さな存在達も
ただひとつの存在に打ち消される――打ちひしがれる
空を切る腕は切り落とされ、自我を失った】

タナトスは薄ら笑いを浮かべた。
青白く光る杖を握り締めた。冷たい感触が手のひらを伝い、身体全身を包み込んだ。杖は本来の姿に戻りたいらしく、いつもの鼓動より、脈が荒かった。
「我の鎖は今解き放たれた！我は……神を超越しせめし―死―という者だ」

杖――と思っていた物は形を変え、鎌になっていた。大鎌。仕掛け刃だったのだった。
その大鎌。形容すると、デスサイズ。死神の鎌。

「チビル！カロリ……カロンを守れ！」
「分かりましたっ！」
さっと、タナトスとツビルは入れ替わり、ツビルが胸から小型拳銃を取り出した。金色にコーティングされたそれは、神々しさを放

つばかりである。

「死を記憶せよ《Ｍｅｍｅｎｔｏ　ｍｏｒｉ》」

黒いコートを羽織い、鎌を担ぐその様は、まさしく死神。

その男、冷たく、そして本来の人間味溢れる笑みで……。恐ろしく、普通の笑みで……。

刈っていく。刈っていく。刈っていく。精神を。死欲を。そして、絶望を。

青く揺らめく刃が橙色の虚空を切るたびに、青から蒼へ、そして藍へと色を変える。それを意味するのは、ただ意思のみ。

青が人影を通りぬけるたびに、人影はひざまずき、一影となる。

そして、終わったと思えるその時には、ただ、燃える書物しかなかった。

―Scene 2― 思惑の書（後書き）

思惑の書。

生けるものから意思をなくし、意志にとりかえる。

その過程は、辛く苦しい……

―Scene 3― 偶像（前書き）

偶像……神を象ったそれは、それなりの恩恵を授かる。しかし、それは始祖の物に限る。つまりは、その偶像を所有することによって、象られた神の力を薄まっていながらも使用することができるようになる。

―Scene 3― 偶像

小一時間ほどで、集落は生気を取り戻した。
人々に希望が生まれ、我々は手厚くもてなされた。
そこには“本当の力”の影響はなかった。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・
～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・

深夜。
俺は目を覚ました。
「上手く嵌められたみたいだな……」
月光が照らす窓辺に座る影を見つめながら呟く。
その影は一ミリも体を動かすことなく、青年の声で言葉を発した。
「お久しぶりです。ムーンガルド子爵。いや、大尉殿と呼んだ方がよろしいですか？」
影はククと意地悪く笑い、スタッと板張りの床に着地した。
「いいや、タナトスと呼べ。メイスフィールド伯爵」
「はははははっ！相変わらずですね、タナトス殿」
そんな哄笑をものともせず、冷静な口調で話を切り出す。
「お前がこの土地を買い取ったときは、何事かと思ったが……。思惑の書を使うとはな」
伯爵の顔には、先ほどの笑みと、苦痛に歪んでいた。
「あなたは勘違いしておられる、大尉殿。私は苦痛を与えない。この皆様も了承して私の駒になったのですよ？あなたには分からないかもしれませんがねっ！」
「分からないなぁ。お前ら人間の考えなんて……」
「あんたも人間だろうにっ！しかし、もう手遅れです。虚像と偶像が向かい合うその時、本当の力が発揮されるのです！あなたにはそ

の礎になってもらいます！」

【全は小にて滅ぼされる
　小は一にて滅ぼされる
　一は全にて吸収される】

　そう唇が動いた後、影の背後の窓から、強烈な光が差し込んだ。
　その直後に見えた影の顔は、もはや人と呼ぶのさえ躊躇われた。
　つぎはぎだらけの顔に、爛々と光り物々しさを放つ眼球。
　刹那。後頭部を物凄い衝撃が襲った。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

　少年はどこにでもいる中学生だった。
　遊びに明け暮れ、異性にも人並みに興味を示した。
　平凡で平和だった日々も。
　ある日突然現れた、義父によって壊されることになった。
　始めは、愛想のいい顔で近づいてきた。物を与えられた。
　単純だった、少年はすぐにだまされた。
　騙されたと気づいたのは、母が結婚をして一ヵ月後だった。
　気に入らないことがあると、殴られた。蹴られた。投げられた。
　外では、愛想のいい父親を演じており、下手に訴えられなかった。

　幾度も殴られた。こんなこともできないのか、と殴られた。遊びなんて下らん、といって蹴られた。
　痛い。痛いよぉ……。身も心も痛いよ……。
　母は少年が殴られる度に庇い、突き飛ばされ、泣いていた。それが少年の心をいつも傷つけた。
　別れればいいのに……。

そう思ったが。母がそう出来ない理由が分かった。分かっていた。
少年のためだった。経済的なことだった。
そして、一年後、母は死んだ。

最期の姿は居間で倒れたやつれた母だった。

葬式の後は今まで一番酷なものだった。
椅子で顔面を思い切り叩かれたり、首をつかまれガラスに突っ込まされたり。凄惨なものだった。
畳は血に染まり、少年は立つのも不可能な状態だった。
殴られる殴られる殴られる殴られるナグラレルナグアエル痛い痛い痛いイタイイタイ痛い。
苦しいのはもういやだ……。そうだ、こいつを殺せば……。

少年の心にどす黒い感情が廻った。

殺せ殺せ殺せ殺せコロセコロセコロセコロセ

少年はカバンからカッターナイフを取り出し、義父の背後に立った。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・
〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・〜・

「ははっ！まだ動けるのかい？この人殺しがっ！」
「仲間殺し（フレンドマーダー）が……言うかよ。それ……。はぁ……はぁ」
伯爵はまた、ははっ！と笑った。
「そりゃそうだ。しかし、我ら兵士だったものは人を殺して当然だろうよ。さぁ、意思を捨てたまえよ。苦しいのはいやなんだろ？吐

き出しちまえよ、意思を！」
先ほどまでの丁寧な物腰は崩壊し、飢えた獣のごとく咆哮で捲し立てた。
さて、どうしたものか……。俺は今、動けそうにない。だったら、救援をよぶか？どうやって。二人は別の部屋に泊まっている。助けをもとめたところで、聞こえるはずがない。
「さぁ、考えろ！考えたところでどうも出来ないがなぁ！ははっ！」
俺の考えを見抜いたかのように言い放った伯爵。
「あぁ、そうだな。“今”の俺にはどうもできないな」
「そうだろそうだろっ！お前は無力だっ！」
言葉の意図が分からなかったのは、精神が錯乱しているからだろう。
所詮そうなったら、ただの獣。俺には歯向かえない。
「……冥土の土産に……ひとつ聞かせてくれ……なんの偶像だ？」
言葉は理解しかねるが、伯爵には伝わったらしく、冷たく微笑んだ。
「ンザンビ。ゾンビの語源となった神の偶像だ」
そしてその虚像。
「そうか……。しかし、先ほどの問いは、貴様の冥土の土産だ」
そう言い放つと、立ち上がった。
「なぜだっ！なぜ立ち上がれる！四肢の意思は削ったはずだっ！」
「人間ではそうだろうな、動けんよ」
不敵に笑い、胸元で光っているソレを取り出す。
神々しい光を放つソレは、少年に翼をつけた像だった。
「……我は神を超越しせめし－死－という者だ」
その冷たい声と落胆の悲鳴が重なり合う。
「タナトスの偶像？否、虚像だ」
「馬鹿な……。虚像だけでは人間の境地を脱してしまうぞ！」
「言ったじゃないか。人間ではない、と」
伯爵の顔が驚愕に歪んだ。いや、恐怖か。

「身を滅ぼすぞ！」
「“私達は生まれたとたん死に始めている”」
「は？」
唐突の言葉に、伯爵は息を止めた。
「そして“人生はほんの一瞬のことに過ぎない。死もまたほんの一瞬である”」
なにかの文章を読むがごとくに目を細めた。
「簡単だろ？一瞬がどれだけ短くなろうと、一瞬なんだ」
とめていた息を吐く伯爵を視界に捉え、唱える。

【われわれは絶壁が見えないようにするために
何か目を遮るものを前方においた後、安心して絶壁の方へ走っているのである】

「皮肉だろ？お前ら人間はいつもそうだもんなぁ？」
カツ、カツ、といつの間にか履いていたブーツが床を鳴らす。
伯爵は腰を抜かせ、恐怖のあまり失神した。
「冥土の土産にいいことを聞かせよう。神はいる……。じゃあな、いい旅を。軍曹……」
伯爵の首筋に手を当て、何かを呟いたその時、伯爵の身体は黒い砂となり、月の御許に真の光を輝かせるのだった。
窓の脇に置かれた名もない野草は、主人の死を見届け、役目が終わったかのように、黒い砂とともに空を舞った。

―Scene　4―　像（前書き）

力が欲しい……。
この国を見返す力が欲しい……。
私をいらぬと見放したこの国が妬ましい。

そんな時、私に希望の光がさした。
私の手には「思惑の書」という書物が収められていた。
なかには、ンザンビという神と偶像の存在がこと細かく書かれていた。

そう！これこそ私が求めてきた力だ！
早速一つの集落を買取り、村人に私に授かった力を使った。
するとどうだろう。村人が私のいうことをきく駒となったのだ。
しかし、偶像だけの力では精々、二人や三人程度のゾンビは作れなかった。虚像の話が私の耳に入ったのは、そう落胆した時だった。
虚像だけを使うと、神の力に耐えられなくなり、身を滅ぼすというが、偶像と虚像を上手い具合に使用すると、人間が持ちえる力の最大限を与えられる。

私は「思惑の書」を、人を操ることが出来る書物として公開した。
そのエサに釣られ、やってきた阿呆共を村人だけでは飽き足らず、ゾンビにした。ゾンビというが、実際は意思をなくした人間だ。長く拘束してはもたない、あと少しで攻め込まなければならない。そう考えた矢先だった。
あの男がやってきたのは……。

―Scene 4― 像

空虚な部屋を統べるのはただ無音だけだった。
そこに男のため息が混ざる。
そしてまた無音。
窓際に座り込んだ男はそのまま身動きする気配はなかったが、その姿には圧倒的な存在感があった。
男、というより青年と形容したほうがいい年齢なのだろう。若々しい肌を、月明かりが照らしだした。

「どうしましたか！」
バタンっと、物凄い音が沈黙を打ち破り、甲高い声をあげながら少女と少年が流れ込んできた。
少年は十八歳か十九歳程度のまだ大人とはいえないながらも飄然とした立ち居振る舞い。一方、少女はといえば、十五、六歳ほどの容姿をしており、どこか落ち着きなくおろおろしていた。
「……帰るぞ。偶像を破壊して」
青年はそう言い立ち上がった。
「偶像？」
少年は怪訝そうに訊いた。しかし、その答えは無言の沈黙。
青年は顔をしかめたが、すぐに普段の冷たい表情に戻り、歩き出した。

1.

無駄に広い庭に、先ほどまでにはなかったであろう巨大な像が建っていた。
醜悪な姿で、しかしどこか悠々と……。

「これ、は……？」
少年は手で笠を作り、頭上高くを見上げた。
「神に捧げられし像。神に象られた像」
青年は低く呟き、杖を天にかざした。
月にねめつけられ、滑らかな表面をあらわにした杖身（じょうしん）は、自然のものではない、白く輝きを帯びていた。
「死を記憶せよ《Ｍｅｍｅｎｔｏ　ｍｏｒｉ》」
青年が唱えると同時に、杖の先端から、栓がとれたかのように、刃が出てきた。
黒いコート、黒い皮製のブーツ、そして漆黒の髪。そのどれも揺らすことなく青年は前に歩き出す。風もその行方を見守った。
【かつてマルティン・ルターはこう言った。“死は人生の終末ではない。生涯の完成である”と】
歩きながらも淡々と詩を読むかのように言葉を並べた。
【しかし我は思う、その完成品は誰が愉（たの）しむのか……】
青年は立ち止まった。
【死神と悪魔は“戯れ”、神、天使にては“愚行”なり……。それを示すは……】
セファー・ラジエル《Ｓｅｆｅｒ　Ｒａｓｉｅｌ》

突如、潜んでいた風が吹きすさんだ。
ソレは人間に激しい耳鳴りを与えると同時に、デストルドー……死欲を取り去った。
「その風、汝を導かん……」
漆黒の風の軌道にのり、青年が空高く舞い上がった。
丁度、像の首下あたりに達した時だった。
月光が辺りを切り裂いた。

2.

朝。

崩れ行く像と屋敷を目の当たりにし、人々が驚嘆の声を漏らした。

崩れ行く物に対してではなく、屋敷の存在に対してだ。

――アホだね、ほんっとアホ……

喧騒の中、その透き通った声が青年、タナトス・ムーンガルドには聞こえた。

「愚かしいな……ほんと愚かしい……」

青年は、その声に返すかごとく、深く呟いた。

「あれは……偶像とはなんなのです？“本当の力”とやらの真相も……」

その呟きを聞きつけ、少年、カロリス・バートンが尋ねた。

「説明か……。どうも苦手だ。文学は得意ではないものでね」

そう笑みを漏らし、カロリスの執筆作品である「グリム」を取り出した。

羊皮紙に書かれたそれは、昨日の戦闘をかいくぐってもなお、くたびれておらず、字にも躍動感が加わった気がする。

「“本当の力”とは、云わば魔法みたいなものだ。言うまでもないが、その力とは生きている」

カロリスは腑に落ちない様子でふうむ、と呻いた。

「でわ、その力と僕の文とどうつながりが？」

「君はそれを本気でいってるのかい？」

ジト目で見られながらもカロリスは、「は、はい」と頷いた。

「はぁ、貴様の脳はやはり字をつづられた紙で出来ているのかい？なるほど、それならば脳に虫食い穴があったとしても不思議ではないな」

「く、く……。そ、それで？」

要するに、バカという言葉をまにうけて、堪えながらも話を続け

させた。
「簡単だろう。貴様の書物が“本当の力”に帯びているんだ。本に必要なのはその意思だ。“本当の力”というのは〝“本”にあって“当”然の“力”〟だ。本来、本という物は、詠むためにうまれたものだ」
そこでタナトスは深く息を吸い込んだ。
「魔法を使用するときは魔法名を叫ぶだろ？それと原理は一緒さ。魔法はその魔法名に含まれる特定の周波数、意思、そして音列。それだけで魔法は成立する。魔法は厳格な幻覚だ」
そこで二度目の笑みを見せる。
それは今までの冷たさをかき消すほどの、無邪気な微笑みだった。
「聴覚でその周波数やらをよみとり、脳を混乱させる。炎の球が迫ってくるグラフィックを見せたり、皮膚神経に焼け付くような痛みを与えたり……。しかし、本当の力は意思の強いものに授かることができる。以上だ」
歩く彼の背中を見つめながらカロリスは思うのだった。
偶像の、説明は？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1648y/

ヤーウェの偶像

2011年11月6日02時20分発行